慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自然研究者の類型学 : E.T.A. ホフマン『ハイマトカレ』について
Sub Title	Über die Typen der Naturforscher in E.T.A. Hoffmanns Haimatochare
Author	中村, 大介(Nakamura, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.181 (62)- 196 (47)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自然研究者の類型学
── E.T.A. ホフマン『ハイマトカレ』について ──

中村　大介

1. どっちつかずの美学

E.T.A. ホフマン（1776-1822）の伝記を記したリュディガー・ザフランスキーは、ホフマンの生きる姿勢から彼を「＜あれか、これか＞の敵対者」と呼んだ。[1] もちろん、作者ホフマンの生きる姿勢がそのまま彼の作品にあらわれていると簡単にいってのけることはできないが、ときに解釈多様な描写・記述を読者の前に披露して決定的な態度を明示しない彼の作風は、読む者を当惑させることがしばしばあるのもたしかである。これは、ホフマンの作品を読んだ経験のある者ならば、一度は感じる印象だろう。

1819年に発表された書簡体小説『ハイマトカレ』[2]は、ホフマンのどっちつかずの態度を分かりやすく表したものの一例といえる。この物語はE.T.A. ホフマン前書きと15通の手紙からなる。主要人物はメンジースとブロートンという自然研究者である。ふたりは親友同士であったが、「ハイマトカレ」がどちらのものかをめぐって決闘に至り、両者とも死ぬ。この「ハイマトカレ」は島のかわいい娘であるかのように読者は錯覚させられるが、実は昆虫で、それも虱であったとわかるというどんでん返し的な結末を迎える。この虱をめぐる争いの張本人ふたりのどちらにも軍配をあげないところは、ホフマン作品の「どっちつかず」の典型といえるだろう。ホフマンは足を踏み入れたことのないハワイを舞台としたこの作品を書くために、友人のアーデルベルト・フォン・シャミッソーに問い合わせて必要な情報を得ようとしている。[3]

DKV（=Deutscher Klassiker Verlag）全集版の注釈をみると『ハイマトカレ』

は、『ちびのツァッヘス』や『蚤の親方』と同じく、ホフマンの「自然科学者諷刺（die Satiren auf Naturwissenschaftler）」の列に入るとされる。[4] 比較的早くにこの作品に注目したクリスタ＝マリア・ビアズレーは登場人物の「名誉欲、所有欲と虚栄心」が「自身の破滅、そして研究結果の滅却」つながったものと読んでいる。[5] 1970年代後半にアンヌリーゼ・W・ムーアがこの物語がハワイを舞台としているのに着目し、ホフマンがいかに事実を下敷きにしてこの作品を作り上げようとしたかを示した。[6] それ以来、特に2000年代からは例えばアクセル・ドゥンカーの研究のようにポストコロニアル的な視点から論じられる例が見られるなど、[7]物語の舞台を念頭に置いた読みが目立ち始める。[8] そうしたなかでもデュルベックはその流れを汲みつつこの作品の「学問を批判する傾向」や「学問諷刺の機能」を改めて指摘している。[9]『ハイマトカレ』を研究者に対する諷刺・批判とみなす見方は、もはや一般的な見解といってよい。

しかし、『ハイマトカレ』を諷刺作品と読むにせよ、これまでの研究ではその対象は「研究者」もしくは彼らが携わる「学問」と、あまりにも大づかみに捕えられているようだ。主要登場人物ふたりが冒頭では「極めて親密な友情という濃密なる絆」（III. 666）に結ばれた親友とされ、なおかつ締めくくりとなる決闘によって両者に平等に死と弔いが与えられる。そのために読者はふたりを「自然研究者」と一括りにして見る方向へ誘われる。だが、メンジースとブロートンのふたりの研究者の気質がはっきりと描き分けられた状態で物語が展開する点に注意を払わなければならない。後に示すことだが先取りしていうと、ブロートンが自らの研究のみならず探検隊の目的を念頭に置きつつ活動し、さらに学者である自分が如何にして世間と関わるかを強く意識する人物として振る舞うのに対し、メンジースは、孤独で視野の狭い昆虫学者、さらには素人学者のイメージを抱えている。このような作中の学者の描写上の差異を見落とし、この物語を大雑把に自然研究者諷刺または批判としてしまっては、テクストの表面にあらわれない研究者の類型の違いの見落としにも陥りかねない。本論の主な課題は、『ハイマトカレ』の主要人物メンジースとブロートンがそれぞれ全く異なった学者の類型として描かれていることを示し、新たな作品解釈の可能性を探ることである。

2. 18世紀よりの自然研究の趨勢

2.1. 人間研究のための世界旅行

『ハイマトカレ』の直接のモデルとなったのはホフマンの友人であったシャミッソーの世界旅行であるが、少しさかのぼって18世紀の事情を確認しておきたい。18世紀に出版された夥しい数の旅行記は、「異文化世界に十八世紀がよせた大きな関心の産物」といえる。[10] カントは、人間を知る方法として旅行に一定の価値を認める。[11] 旅行は新たな人間を知る機会であった。人間学が隆盛を誇った18世紀以降のドイツでは、ゲオルク・フォルスターやアレクサンダー・フォン・フンボルトなどが世界旅行に乗り出す自然研究者として知られていた。[12] ここで、一例として出版されたフォルスターの『世界周航記』を取り上げてタヒチについて書かれた章を見てみると、植物や動物よりも島民の習俗や言語についての記述の方が詳しい。[13] 18世紀において人間は重要な観察対象となり得たのである。

ドゥンカーは、『ハイマトカレ』を構想する際に必要な知識を得るためにシャミッソーに宛てて書いたホフマンの書簡を手掛かりにして、この作品では信憑性ある描写が重んじられていることを指摘している。[14] この作品の前書きには、物語をなす15通の手紙を伝えた人物が、シャミッソーを彷彿とさせる「A. v. C.」(III. 666) なる人物であると明記され、なおかついくつかの手紙に付された日付として「18***」(III. 666など) と物語が繰り広げられるのが19世紀であるのを示す年号が見られる。『ハイマトカレ』が発表された1819年はシャミッソーが世界旅行から帰ってきたばかりであり、この物語が最新のニュースを基にし、なおかつ新しい時代の作品として構成されていると当時の読者に充分に訴えかけたに違いない。しかし同時にドゥンカーは18世紀のフランス探検家ルイ＝アントワーヌ・ド・ブーガンヴィルや上述のフォルスターがタヒチを表現する際に用いる語彙を例に挙げて、それらと『ハイマトカレ』において使われている表現の類似を示唆しつつ、この物語が多くの点で当時のタヒチをめぐる南洋のディスクールと結びついていることを示す。[15]『ハイマトカレ』の探検旅行の模範イメージとして念頭にあるのはシャミッソーの世界旅行のみならず、18世紀の人間研究をひとつの大きな目的とした旅行でもあるとわかる。[16] 研究者という種類の「人間」の生態を描き出すにあたって、『ハイマトカレ』の舞台としてはヨーロッパではなく、異国の地ハワイが必要だったのである。

2.2. 研究者であること

『ハイマトカレ』を構想する際、シャミッソーに宛てた書簡中のホフマンのことばを信じれば、メンジースとブロートンはイギリス人と想定されている（VI. 160）。そうでなくても、登場人物・船の名前やメンジースの友人がロンドン在住の人物であることなどを勘案すればイギリス系の探検隊の物語であるという設定は守られていることは明らかであるから、イギリスにおける自然研究に携わるもののイメージを踏まえておくことは無益ではあるまい。イギリスでは17世紀後半に王立協会が設立されたが、その実態は「知性ある素人というか、聖職者、貴族、思想家、文人たちをも含む集団であって、専門家としての科学者はむしろ少数グループであった」。[17] 彼らはヴァーチュオーソと呼ばれたが、この呼称は18世紀に移るにつれて諷刺に用いられるようになり、文化史家M・H・ニコルソンの表現を借りれば「擬似科学者（pseudo-scientist）」を指す表現になったという。[18] しかし、石原あえかによれば、「一八世紀後半のヨーロッパでは、総じてまだ自然科学者が職業として成立していなかった」という。[19] さらに石原は注で「科学研究が専門職として社会に定着し始めるのは思いのほか遅く、たとえば《科学者Scientist》という語が英語圏で初めて登場するのは、一八四〇年頃だという」と付け加える。[20]「科学者」という職業自体が成立していなくても、当時の学問に携わる者のなかには偽物が含まれているという認識はあるのは、専門家も愛好家も同じように活動しているために起こる現象であろう。ドイツの自然研究に関する事情も一瞥しておこう。ベルリンでは、18世紀後半に「ベルリン自然研究者友の会」と名のついた私的な組織が生まれた。この組織が発行した雑誌の創刊号に掲載された『ベルリン自然研究者友の会発足の歴史』には、次のように記されている。

> 博物学を好む傾向が現在支配的でほとんど普遍的ともなっているにも関わらず、我らがベルリンのような大都市において、熱心な愛好家（die eifrigste Liebhaber）が手を組んで、したがってより強力におのれの見解の拡張を促進できるような団体の設立に必要な措置をとろうと思いついたり、それに向けて真剣に努力をした人がひとりもいなかったのは、常に驚くべきことであった。わたしには、複数人がひとつの意図のために一致するのが必要でより多くの実りをもたらす学問は、被造物という広大無辺の領野を知る学問に他

ならないように思われる。[21]

この文章では、博物学が流行している現状把握に基づき、さらなる促進のため研究者同士の協働の必要性が説かれるが、その際には「愛好家」ということばが使われている。自然研究に関わるのが必ずしも専門家だけではなかったのはドイツにおいても同じである。

先述の通り、先行研究において『ハイマトカレ』を学者諷刺とする主張は特に目新しい意見ではない。ここで、この作品にあらわれる学者の戯画的な描写は、必ずしも全てがホフマンの独創ではないことを押さえておきたい。啓蒙期以来の学者諷刺を研究したアレクサンダー・コシェニーナにいわせると、昆虫学者のごく小さな視点に限られた知覚は学者の戯画化には格好の素材だという。[22] 17世紀後半から18世紀全体において、昆虫のようにあまりに通俗的な対象と取り組んでいると、どんな偉大な学者でも、イギリスのジョセフ・アディソンやフランスのジャン・ド・ラ・ブリュイエールたちの手にかかって笑い者にされた。[23]

そして、博物学において研究者同士の協働の必要が叫ばれる一方で、学者には「孤独」がイメージとしてつきまとっている。「孤独」をめぐるテーマ群は、啓蒙の時代において社交の問題との関連で論じられた。ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンの『孤独について』や、クリスティアン・ガルヴェの『社交と孤独について』が著名な例として挙げられる。[24] 特に、ツィンマーマンは学者の孤独について、「孤独のいくつかの欠点」と名付けられた章でとりあげ、限られた人間とのみ付き合うか、もしくは全くひとりで生きる学者が持ちうる欠点を挙げる。[25] 18世紀に孤独を論じた理論家たちの見解は、学識の多くの種類は孤独な状況のなかで最も育まれるが、世間や人間に対して気おくれするという、社会的な振る舞いや言動における特異性を育てるのを孤独が助長してしまい、それは病的な徴候にまで至るとするもので、こうした特徴は諷刺の対象とされた。[26] 昆虫学者も、孤独な学者という姿も、いずれも以前から諷刺において使われてきたイメージである。こうしたいってしまえばオリジナリティのない諷刺・批判の型があえて使われるのは、諷刺・批判のメッセージに意味を持たせるためというよりも、すでに多くの読者に了解されている諷刺の型は自然研究者の類型を描き出すにあたって都合がよかったからではないだろうか。『ハイマトカレ』に登場する一部の学者に対する描写では、虫に一心不乱に注意を寄せる研究者の熱心さから生じた視野の狭

さと学者の「孤独」というテーマが結びついている。

以上のことを踏まえて、メンジースとブロートンがいかに異なる人物として演出されているかを見る前に、ある人物に触れておこう。すなわち、メンジースがロンドンの友人に宛てた手紙のなかのエピソードにあらわれる老中佐である。まず、この中佐という肩書から、この人物の本業は学問ではなく、軍人であることがわかる。彼は自然研究にはあくまで愛好家として関わっているのだ。さらに彼の暮らしぶりについて見てみよう。

> この老中佐は（ぼくはケーニヒスベルクで面識を得たのだが）、殊に昆虫に関しては、おそらくかつて存在したなかで最も熱心で最も不屈の自然研究者だ。そのほかの世界はすべて彼にとっては死んだも同然で、彼がどうやってその存在を人間社会に唯一知らせることができるかといえば、その極めて耐えがたい、笑ってしまうような吝嗇とひとたび白いパンを食べてしまうと毒におかされるとした固定観念（die fixe Idee）だけだった。（III, 669）

研究者の団体に参加している様子は全くないばかりか、人間の社会には背を向けるような生活をする、極めて孤独な人間といえる。そして「固定観念」という表現も用いられ、彼が抱える狂気がほのめかされる。中佐の社交性のなさ・人間への興味のなさは、兄弟がケーニヒスベルクに住まう彼を訪ねたとき、顕著にあらわれる。

> この老人は机に座り、頭を垂れてルーペ越しに白い紙の上の小さな黒い点を観察している。弟が大きな喜びの声を上げる。弟はこの老人の腕のなかにとびこもうとする。しかしこの老人は、目を一点から外すことなく、手ぶりで彼を下がらせ、「だ、だ、だ、だまれ」と繰り返して彼に命じるのだ。「お兄さん」アムステルダムの弟は叫んだ。「お兄さん、どういうおつもりですか！――ゲオルクですよ！あなたの弟が来たのですよ、アムステルダムから遠出して、30年は会っていなかったあなたに今生で再び会おうと！」（III. 670）

この黒い点は実は芋虫で、中佐はそこから目を離さずに熱心に観察を続ける。彼

の集中力は観察対象にのみ注がれている。熱心さのあまりに視野が極めて狭まり、もはや30年ぶりに会う兄弟にすら興味を持たないのだ。

以上で見た通りこの老学者の描写には、以前からある批判・諷刺における学者のイメージの影響が見られる。物語の主要人物のメンジースと、親友ブロートンにはどのような特徴が見られるだろうか。

3. メンジースとブロートン

メンジースとブロートンは親友同士という設定であるが、同じ船に乗っているとはいえ、ふたりは同じ立場とはいえない。「ディスカバリー号の乗組員はもう揃っていて、船に空きもあまりない」(III. 667) といわれており、少なくともこの探検旅行ではメンジースを連れていくつもりがなかったとわかる。メンジースがロンドンの友人ジョンストンに宛てた手紙のなかで「それでも、ぼくとこころが密接に通い合う高貴なるあのひとが、あの望みを力強く支持してくれたので、総督も彼のいうことを認めて下さった」(III. 668) とブロートンに対する感謝の念をにじませていることからもわかるように、ブロートンの推挙によってなんとか船に乗せてもらったのである。正式隊員として立場あるブロートンと選ばれなかったメンジースという違いを描くことで、プロフェッショナルな学者と素人学者の差を表しているといえるのではないだろうか。そのふたりが同じ船に乗っているというのも、先述の通りの「科学者」が職業として成立せずに専門家・愛好家の区別が曖昧な状況と相似する。メンジースからジョンストン宛ての手紙をさらに見てみよう。

> わが友よ、君だって昆虫界こそ自然のなかで最も不思議で、最も秘密に満ちた領野であると思い至るだろう。わが友ブロートンが植物界及び完全に洗練された動物界 (vollkommen ausgebildete[] Tierwelt) を研究対象としているとするならば、ぼくは奇妙で、しばしば究めがたい生物たち、植物と動物の中間物、橋渡しでもある生物たちの産地を本拠としているのだ。(III, 670f.)

ここは、研究者同士の協働も示唆されているが、ブロートンは植物学・動物学者、片や自分は昆虫学者と、それぞれの研究テーマによって分類する場面でもあ

る。コシェニーナは、「ほとんど収拾のつかないといってもよい対象の広がりを持っているのにも関わらず、昆虫学が制度上独立した学問の専門分野として根を張り、動物学から解放されるのはかなり難しい」とこの学問の特徴について述べる。[27] 昆虫学に対する諷刺の多さ、そもそも昆虫学者が専門家として認められづらいことで、昆虫学者は微妙な立場に立たされる。上の手紙でブロートンが修める動物学を形容する際の「完全に洗練された」ということばは、動物学に従属する昆虫学に携わるメンジースの卑屈な気持のあらわれとも読める。ふたりの描写における差異をさらに細かく見て行こう。

3.1. メンジース

メンジースは例の老オランダ人中佐の話を引き合いに出すときに、「ぼくはあの老オランダ人中佐に匹敵するところまでは決していかないだろうが」（III. 669）と付け加える。たしかに、中佐とメンジースとには違いがあるようだ。ロンドンの友人エドゥアルドに宛てた手紙のなかの記述を引用する。

> ぼくには君がぼくの情熱について皮肉に微笑んでいるのが目に見える。君がこういうのも聞えてくるよ。「さてさて、完全な新しいスワンメルダムをポケットに入れて戻ってくるだろうが、おれはあいつが見てきたその異国の民族の好み、しきたり、習慣、生き方について質問して、どんな旅行記にもないような、口承でしか伝えられないような本当に微細なひとつひとつの詳細を知りたいと望んでやったら、いくつかのマントといくつかのサンゴの飾りを見せるばかりで、それ以外には多くのことをいえはしないだろうな。やつは自分のダニやカブトムシやチョウなんかにかまけて、人間を忘れているんだ！」（III, 668f.）

メンジースは自分がどう思われているかを意識する能力を持っているという点で、昆虫の研究ばかりに気をとられているオランダの老中佐とは異なる。しかし、自分が昆虫に熱中する様子を冷笑的に眺める友の様子を想像して吐き出したこのセリフには、友人にも自分が理解してもらえないというメンジースの抱えている孤独が垣間見える。自分が情熱を持って取り組んでいる昆虫が他人にとっては取るに足らないものであると自覚している。昆虫よりも「異国の民族の好み、

しきたり、習慣、生き方」の方がひとびとの興味をそそるだろうことをわかっている。この探検旅行そのものの目的はドゥンカーもメンジースの手紙から読み取っているとおり、オアフ島の王「タイモツとの友好関係をより強固にする」（III. 668）ことなのだ。[28] 自らが孤独であることを気にしているかどうかの差はあるにせよ、メンジースと老中佐は孤独である点で近いところにいる。

しかし、彼の視野の狭さは『ハイマトカレ』を『蚤の親方』と共に論じた土屋京子も指摘する通り[29]で、中佐に決して引けを取らない。彼がハイマトカレを発見し、名づけるに至った経緯を語る部分に注目してみよう。

> そこでぼくは見えない手に引き寄せられるように草むらのなかへ入った。ざわめく音をたてながらぼくにやさしい愛の言葉で話しかけているみたいだった。入るやいなや、ぼくは目にする ── おお、なんてこった！ ── かがやく鳩の羽毛の色とりどりのじゅうたんの上で、みたこともないほど極めて小さく、極めて美しく、極めて愛らしい島の娘が横たわっている！ ── いや！ ── 外見の曲線がすでに、このかわいらしい子がここの島の娘の種族の仲間であるのを示していた。── 色、姿勢、外見、すべてが他と違っていた。── おどろいてうっとりしたあまりに、ぼくは息がつまった。── 慎重にその小さな娘の所に近づいた。彼女は寝ているようだった。── 彼女を摑んで、一緒に連れ去った ── 島で一番壮麗な宝はぼくのものになった！ ── ぼくは彼女にハイマトカレと名づけ、彼女の小さな部屋中に美しい金の紙を貼りつけ、彼女をみつけたときに彼女が下に敷いていた色とりどりの輝く鳩の羽根で彼女に寝床をこしらえてやった！（III. 672）

この物語を読んでいる途中の読者であればハイマトカレを人間の娘であると思うだろうが、一度最後まで読んで結末を知ると、描写の奇妙な部分に気づく。草むらに入るやいなや、鳩の、それもそのなかの虱にいきなり目を奪われる。メンジースの注意・視界が一気に極めて小さい範囲に絞られていく。さらに、これまではロンドンの友人エドゥアルトに宛てて昆虫・昆虫学の話をするときには、「── しかしだ！ ── やめておこう、君を疲れさせてしまわないように」（III. 671）と自分で打ち切ったり、もしくは捕まえようと狙っていたチョウの話をする際に「名前は君の興味をそそらないだろう」（III. 672）などと気を使うそぶりをみせ

たりしていた。ところが、このハイマトカレ発見のときの様子を語るときには、ブロートンとの共同研究のことを覚えている様子もなければ、手紙を宛てている友人ジョンストンにも気を使うことなく、自分の世界に浸っている。ハイマトカレの美しさを伝えることばかりに気をとられたせいで、虱を人間と間違えられても仕方のない表現を含む文章を書いている。昆虫ばかりに気をとられて人間に興味を示さずに孤独に生きる研究者として描かれたオランダの老中佐にもみられた、小さな対象に異常なまでに注意を寄せる昆虫学者の特徴がメンジースにも見て取れるのである。加えて、メンジースはハイマトカレをラテン語で「成虫になりつつある虱で、台形の胸と、楕円の腹をしており、後ろへつき出ていて、脇からは波状になっている云々。人間に棲みついて、ホッテントット人やグリーンランド人の好物である。角の大きい寄生虫でニルムスの種類で、長い立派な頭を持ち、胸には比較的大きい甲があり、槍のような腹をしている。そして、アヒルや鵞鳥、鶏にも棲みつく」(III. 678) と記述する。[30] このラテン語は学術的な表現と稚拙なラテン語の混ざり合ったもので、[31] ここにもメンジースの学者としての素人性が垣間見えもするのだ。

3. 2. ブロートン

メンジースと老中佐の類似性が強調されるほどに、メンジースとブロートンとの気質の違いが浮き彫りになる。以下の引用を確認しよう。

> ブライ船長が閣下のもとにわれわれの順風満帆の航海について、すでに詳しい報告をおこなっていますが、船長はまたきっと我らが友タイモツがわれわれを迎え入れたときに示した友好的なやり方を賞賛するのも忘れなかったでしょう。[…] 女王カフマヌへの贈り物として閣下がわたしにくださった金の刺繍がされた赤いマントは、女王に深い印象を与えたようで、彼女は以前の屈託のない快活さを失って、ありとあらゆる嘘みたいな熱狂におちいりました。彼女は朝早くに森の一番深くひと気のない茂みに分け入って、マントをあれやこれやのやり方で肩にかけながら、いろいろな仕草を身振り手振りで練習しています。それを、晩になると集まったとりまきたちにやってみせるのです。[…] ところで、閣下にこのようなお伝えをしなければならないのはとても心苦しいのですが、わたしが多くのよいことを期待していたメン

ジースはわたしの研究を促進するどころか邪魔するようになってきました。（III. 673）

これはブロートンがニュー・サウス・ウェールズの総督に自分と友人メンジースの足並みが揃わなくなってきたことについての懸念を打ち明ける手紙だが、この手紙の主な目的は、オアフ島の王タイモツとの友好関係を新たにできたかどうかの報告である。さらに彼は記された贈物に現地の女王がどう反応したかの記録も忘れない。あくまでブロートンは私情や自分の研究ばかりでなく探検隊の目的を考えて、その一員としての立場を守るのだ。みずからの興味の赴くままに昆虫の研究にかまけているメンジースとの関係について述べる際も、あくまで研究に支障をきたすという職務上のデメリットを挙げており、隊の一員としての自覚の強い人物であることがうかがえる。ブロートンからメンジース宛ての手紙を見てみよう。

まだ君のなにがぼくを傷つけたか聞くのか？　実際、その屈託のなさが、友情に対して、いや社会を成り立たせているような万人の諸権利に対してけしからんやり方で不法な行いを働く輩にはお似合いだ！　――ぼくのいうことを理解しないつもりか？――それならぼくは声を大にして伝えよう、世間がこれを聞いたら君の悪行に愕然とするだろうと［…］（III. 675）

まずはブロートンの視野の広さに注目するべきだろう。ふたりだけのあいだの問題ではなく、「世間（Welt）」までも巻き込んだ問題になると警告する。自分の研究や発見の先になにが起こりうるかを見据え、なおかつその発見を発表する相手を意識している。さらに「社会を成り立たせているような万人の諸権利（die allgemeinen Rechte, wie sie in der bürgerlichen Verfassung bestehen）」まで持ち出して、メンジースの行為が公的に・客観的に見たときにいかにひどい所業であるかを示す。メンジースの視界の狭さとは対照的に、ブロートンは「世間における研究者のありかた」に気を配るのである。さらにメンジースに向けて、以下のようにいい放つ。

そうさ！　ハイマトカレと君が名づけたのは、君がぼくから奪い、あらゆる

世間に対してそれを隠しているものだ。それはぼくの、いやそれどころか、ぼくが甘い誇りをもって悠久に続く年鑑（Annalen）にてぼくのものとして載せるつもりでいたものなのだ！（III. 675）

ここにも「世間」が登場する。そして、ブロートンの目標はハイマトカレの発見について「年鑑」で発表することである。これまでに「年鑑」という言葉は出てきておらず、ここでブロートンが初めて言及する。「悠久に続く」や「甘い誇り」などといった表現からは、自分の手柄を記録して不朽のものにせんとするブロートンの野心が伝わってくる。ブロートンは絶えず世間との関わりを意識し、どのようにして自分の功績を認めさせるかを考える研究者なのだ。博物学に興味を持たないひとに認められることは諦めているメンジースとは好対照をなしている。

4. 結語：自然研究者の夢のあと

彼らの喧嘩は手紙を通して続く。ここからは先行研究を一覧した際にビアズレーを引用しながら触れた学者の「虚栄心」の問題が関わってくる。3. 2. の最後で取り上げた手紙を受けて、メンジースは以下のように返事をする。

ハイマトカレはぼくのもので、ぼくのものとして、君が他人の手柄を自慢気にひけらかそうとしていた（wo Du prahlerisch zu prunken gedenkst mit dem Eigentum des andern）あの年鑑に（in jenen Annalen）載せるつもりさ。（III. 676）

ブロートンのやりかたをあげつらいながらも、あてつけのように今度は自分が年鑑に載せるといいだす。皮肉にも、これまで他人から自分の昆虫に対する情熱を認めてもらうのは諦めていたメンジースの視界がここにきて広がっているといえる。反対にブロートンは怒りに我を忘れて、ハイマトカレを取り返すことに拘泥する。

ハイマトカレをぼくにわたせ、さもないと君の悪行を世間に（der Welt）知らせるぞ。ぼくではない、君だ、君こそが最も悪質なる嫉妬に目がくら

んで、自分のものではない財産をひけらかそうとしているのだ（*Du* willst prunken mit fremdem Eigentume）。しかしそうはいかないぞ。（III. 676）

このブロートンのことばに見られる「ひけらかす（prunken）」や「財産（Eigentum[]）」といった言葉は、もともとメンジースがブロートンに対して使っていた表現である。相手の言葉に激高し、そのまま相手の言葉でやり返す。乗船メンバーの証言にも「そして特にブロートンが結局のところ怒りの炎に燃えていた」（III. 677）とあり、探検隊の一員としての任務を全うしていたはずのブロートンもここではハイマトカレに執着する。虚栄心によって、ふたりの性質が浸透し合う。こうしてふたりの性質がならされた後の決闘で相撃ちに終わるという締めくくり方こそが、これまでメンジースとブロートンの差異を無視する読みを誘ってきたのだろう。

たしかに「科学者」が職業として成立していない時代にあっては、フィクションのなかであっても特に博物学に携わる者の専門家・愛好家の区別を明確にするのは困難だろう。それでも『ハイマトカレ』という作品ではメンジースとブロートンという登場人物に託す形で、対立し得る異なった自然研究者の類型が ── オアフ島の探検隊に選ばれたブロートンと選ばれなかったメンジースという構図をきっかけにして ── 描かれている点こそ注目すべきではないだろうか。そして、そうした類型を描き出すのに、当時から諷刺・批判で取り上げられたような研究者像が利用されもしたのである。本論を通して見えてきたのは、18世紀から論考や文学においてよく取り上げられた学者のイメージを背景とする、研究に熱中するあまり孤独を抱える素人じみた自然研究者と、探検旅行の一員として任務を全うせんとしながら常に世間との関係を意識する自然研究者それぞれの姿であった。

註

本論は、2019年11月24日第10回日本独文学会関東支部研究発表会におけるわたしの発表『対峙するふたりの自然研究者 ── E.T.A. ホフマン『ハイマトカレ』について ──』に基づき、大幅に改訂したものである。

1 リュディガー・ザフランスキー『E.T.A. ホフマン　ある懐疑的な夢想家の生涯』識名章喜訳、法政大学出版局、1994年、3頁。

2 本論での引用・参照の際はDKV版全集を典拠とする。引用後の（　）内にローマ数字で該当巻数を、算用数字で頁数を示す。Hoffmann, E.T.A.: Sämtliche Werke in sechs Bänden. Hg. von Hartmut Steinecke und Wulf Segebrecht unter Mitarbeit von Gerhard Allroggen u. a. Frankfurt am Main 1985-2004.

3 DKV全集版注釈（III. 1102-1104）参照。

4 DKV全集版注釈（III. 1107）参照。なお、本論においては「自然科学者（Naturwissenschaftler）」ということばは極力避ける。理由については注の19を参照。

5 Vgl. Beardsley, Christa-Maria: E. T. A. Hoffmanns Tierfiguren im Kontext der Romantik. Die poetisch-ästhetische und die gesellschaftliche Funktion der Tiere bei Hoffmann und in der Romantik. Bonn 1985, S. 301. DKV全集版注釈でも、研究者のエゴイズムや妬み、虚栄心などのテーマが指摘されている（III. 1106f.）。

6 Vgl. Moore, Anneliese W.: Hawaii in a Nutshell – E.T.A. Hoffmann's *Haimatochare*. In: The Hawaiian Journal of History 12 (1978), S. 13-27, bes. S. 14ff.

7 Vgl. Dunker, Axel: Die schöne Insulanerin. Kolonialismus in E.T.A. Hoffmanns Südsee-Erzählung *Haimatochare*. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 76. Jg. (2002). 3. H. S. 386-402.

8 ドゥンカーの他に一例として以下のものを挙げておく。Vgl. Weinstein, Valerie: Capturing Hawai'i's Rare Beauty: Scientific Desire and Precolonial Ambivalence in E.T.A. Hoffmann's "Haimatochare". In: Women in German Yearbook 18 (2002), S. 158-178.

9 Dürbeck, Gabriele: Ambivalente Figuren und Doppelgänger. Funktionen des Exotismus in E.T.A. Hoffmanns *Haimatochare* und A. v. Chamissos *Reise um die Welt*. In: Fremde Figuren. Alterisierung in Kunst, Wissenschaft und Anthropologie um 1800. Hg. v. Alexandra Böhm u. Monika Sproll. Würzburg 2008, S. 157-181, hier S. 181.

10 ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク『リヒテンベルクの雑記帳』宮田眞治編訳、作品社、2018年、巻末の解説、621頁参照。なお、この段落の記述には主に同書第3章の概説（256-260頁）を参考にした。

11 Vgl. Kant, Immanuel: Anthropologie in pragmatischer Hinsicht. Königsberg 1798, S. VIIf.

12 フンボルトの世界旅行の様子は『新ベルリン月報』でもフンボルト自身の書簡を発表する形でドイツ内地に伝えられていた。一例として、以下の文献を挙げておく。Humboldt, Alexander von: Briefe des Herrn Alexander von Humboldt. In: Neue Berlinische Monatschrift, (August 1801), S. 115-141.

13 Vgl. Forster, Georg[]: [...] Reise um die Welt, [...]. 1. Bd. Berlin 1784, S. 266-340.

14 Vgl. Dunker: a. a. O., S. 388.

15 Vgl. ebd., S. 390.

16 なお、ドゥンカーは探検家クックのことばを引きつつ、『ハイマトカレ』作中の船

の名や使われている語彙などといった設定が、国の威光を示すという18世紀の探検旅行の目的にかなっていることを指摘している。Vgl. ebd., S. 395.

17 M・H・ニコルソン『美と科学のインターフェイス』高山宏訳、平凡社、1986年、195頁。

18 同書、195-200頁参照。

19 石原あえか『科学する詩人ゲーテ』慶應義塾大学出版会、2010年、8頁。さらに石原はこうした時代状況を踏まえ、自然研究に取り組んでいたゲーテの側面にフォーカスをあてた同書において「《自然科学者Naturwissenschaftler》ではなく、《自然研究者Naturforscher》の語を意識して使っ」たとしている（同書、8頁）。『ハイマトカレ』作中ではNaturforscherの語が用いられているため、本論でも石原に倣い、基本的に「自然科学者」という呼称は避け、「自然研究者」という日本語を使用する。なお、愛好家の問題に関連してゲーテのディレッタンティズムとの取り組みについては、以下の論文を参照した。岩﨑佑太「ゲーテにおけるディレッタンティズムの可能性――『親和力』から『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』へ――」『ドイツ文学』第154号所収、2016年、140-155頁。

20 石原、前掲書、254頁。

21 Martini, Fried. Heinr. Wilh.: Entstehungsgeschichte der Gesellschaft Naturforschender Freunde in Berlin. In: Beschäftingungen der Berlinischen Gesellschaft Naturforschender Freunde, 1. Bd. (1775), S. I-XXVI, hier S. If.

22 Vgl. Košenina, Alexander: Der gelehrte Narr. Gelehrtensatire seit der Aufklärung. 2. Auflage. Göttingen 2004, S. 175.

23 Vgl. Daston, Lorraine: 2. Juni 1789. Lichtenberg observiert en détail die Natur, die Gesellschaft und sich selbst. Die Disziplin der Aufmerksamkeit. In: Eine neue Geschichte der deutschen Literatur. 1. Teilband. Hg. v. David E. Wellbery u. Judith Ryan u. a. Übersetzt v. Christian Döring u. Volker von Aue u. a. Jubiläumausgabe. Darmstadt 2019, S. 552-560, hier S. 556. なお、ドイツ語圏文学史上で昆虫学者を批判・諷刺していた者の例として、ボードマー／ブライティンガーが挙げられる。彼らは特に昆虫学者のペダンティックな部分を取り上げている。Vgl. Košenina: a. a. O., S. 175.

24 Vgl. ebd., S. 74-78.

25 Vgl. Zimmermann, Johann Georg: Ueber die Einsamkeit. Mit einer Einleitung herausgegeben von Paul Heinemann. Bd. 2. Hildesheim u. a. 2008. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1784, S. 1-43, bes. S. 11ff.

26 Vgl. Košenina: a. a. O., S. 78.

27 Ebd., S. 183f.

28 Vgl. Dunker: a. a. O., S. 395. 但し、ドゥンカーはここの「友好関係（Freundschaftsbündnis）」（III. 668）という表現を婉曲的なものだとして、作品に植民地主義の影を読み込んでいる。

29　土屋京子「博物学の夢想と冒瀆　――E.T.A. ホフマンの『ハイマトカーレ』と『蚤の親方』――」京都大学大学院独文学研究室『研究報告』第24号所収、2010年、21-43頁、ここは27-28頁参照。

30　この部分の訳出には、DKV 全集版注釈にあるドイツ語訳（III. 1108f.）を参照した。

31　DKV 全集版注釈（III. 1108f.）参照。